

僕は、視線があっただが、平然と、会釈もせず、笑い顔も見せず、冷酷にも、彼女の前を、知らぬ顔で、単に通り返ぎただけだ。

「だれかを待っているようで、

その邪魔になったら困ると思うし、また、話す由（よし）がない。」

僕の態度は、そう言わん態度だった。

どこか、まだ、僕は自分の殻から抜けられない。

僕の体の皮には、自尊心とプライドの、厚い、みえない皮が張ってる。

おばとこについたら、すぐ、寝た。

がっくり来てて、皆に、

僕が気を抜かしているのを

悟られない様に、

「ねむたい」と言って、横になると、本当にすぐ寝てしまう。

夕べ寝たのが二時で、

起きたのが八時前、

眠くて仕方なかった。

扇風機をかけつつ、寝た。

うとうとしながらも、思いは巡る。